

2018 年度国際ユース作文コンテスト

【若者の部】 入選

夢の車輪

(原文は英語)

ジン・ファイ・フォー (24 歳)

マレーシア・セランゴール州

「あはは！ 何をしているんだ。馬鹿じゃないのか！」

歩道にできた穴に私の車イスの車輪がはまってしまったのです。私は絶対に車イスから立たずに穴から抜けだそうと心に決めていました。しかし、近所の人たちの馬鹿にしたような笑いに屈辱を覚えました。

「ああ、友人たちはこんな気持ちだったのか」。車イスの車輪を恥ずかしさでより強く握りながら、私はため息をついて心の中でこのように思いました。

現在「ザ・ホイールパワー (The WheelPower)」という個人プロジェクトを進めていて、2 週間断続的な車イス生活を送っています。私たちの仲間である車イス利用者の視点から世の中を見、彼らが経験する痛みを理解し、都市環境をより障がい者に優しいものに設計し直す効果的な方法を見つける良い機会となるため、このプロジェクトには意義があると強く信じています。

発展途上国である私の国では、障がい者市民が置かれている状況はよく無視されます。私自身も昔は、無意識のうちに車イス利用者全体を障がいと結び付けて不当に定義づけていました。長い間、私たちの冷淡な態度がこの現代的問題に対する偏見を増殖させてきました。今では、障がいそのものよりも「障がい者」というレッテルの方がより大きな障がいとなっています。目は見えているのに、私たちの特別な友だちのニーズに対して盲目になってしまうほど、偏見は私たちの判断を鈍らせているのです。

ザ・ホイールパワープロジェクトを始めるきっかけになったのは私の叔父でした。太り過ぎて足を引きずって歩く 54 歳の気難しい男だったサンシャインおじさんは、1960 年代に脳の感染症によると思われる部分的な知能障がいを負っており、「障がい者市民」というレッテルを貼られていました。いつもイライラしていた彼は、その存在自体が村人を怖がらせていたため、村人からは「村の狂人」と呼ばれていました。そのため、2017 年の終わり頃に私の家族は彼の面倒を見ることを決め、一緒に住むために彼をクアラルンプールに連れてきました。

それから 3 ヶ月間、私はサンシャインおじさんとコミュニケーションを取り、彼が自立できるよう手助けすることに専念しました。毎日朝食の時には、彼は新聞のトップ記事を朗読することで問題を分析する方法を学び、記事の内容について私と話し合いました。日中の彼の役目は、家事を細かく調整することでした。叔父は少しずつ自分の感情を適切に表現できるようになっていきました。夕方には

彼が転ばないように、歩き方を直す簡単な運動を一緒に行いました。そして、夜には彼の集中力を鍛えるために英語のアルファベットや幾何学を勉強し、計算の復習をしました。

結果は衝撃的なものでした。常に褒められ、良い方に導く環境を与えられることによって、サンシャインおじさんのマナーは良くなり、人に共感できるようになったのです。彼は礼儀正しく、社会の輪になじむことができ、友だちと会話を楽しみ、人々に広く受け入れられています。今では自己管理もできるようになり、健康のために自制によってかなり体重を減らしました。素敵な話し相手へと生まれ変わった彼の新しく素晴らしい評判を伝えに、村人たちが私たちの元に押し寄せてきました。サンシャインおじさんは転ぶことなく歩けるようになり、そして何よりも幸せで独立しています。現在、彼はレストランのウェイターとして社会復帰する準備をしています。

サンシャインおじさんと過ごしたこの3ヵ月間は、特別な支援を必要とする人たちに対する考え方を見直すきっかけになりました。もし、彼らのためにもっと何かしてあげることができたらどうでしょう？ もし、車イス利用者が家を出て、自立し、仕事に就くことができるような都市に設計し直すことができたらどうでしょう？

ふと頭をよぎったこの記憶が自分の動機を思い出させてくれたため、私は落ち着くことができました。

「そこの近所のおじさん。私はケガが理由で車イスに乗っているのではなく、車イスを利用している人たちが外出する時にどんな気持ちになるかを理解するために乗っているんです。私はこの街を設計し直すことで彼らの生活を良くしたいんです」。そう言って私は微笑み、穴から出るために車輪をくねくねと動かし続けました。

すると突然体が軽くなりました。誰かが車イスを持ち上げて穴から出してくれたのです。近所の人を手抜きのでこぼこ道を進めるよう手助けをしに来てくれたのです。

「君がやっていることは、素晴らしいことだ」と、彼は静かにつぶやきました。「次は何か一緒にできたらいいな、車イスを使って」

その瞬間に、たとえ小さな変化でも自分が社会を変えることができたことを実感しました。私たちは、このような身近な人に意識を芽生えさせることで、自分の社会や特別な支援を必要とする私たちの友だちの幸せについて責任を担うことができるのです。一緒に私たちの友だちに「夢の車輪」を与えましょう。